



「武揚伝」（佐々木譲著）を読んで

年に一度は歴史小説の大作も読んでみたいと思つてきた。このコラムにも以前触れたことがあつたが、別件（上・下／船戸与一著）も歴史小説として素晴らしい大作であつた。そして、今年は中公文庫から出版され、3冊で1500頁を超える「武揚伝」（上・中・下）を読むことにした。中学校の教科書中の「榎本武揚」という人物の表記も、戊辰戦争で函館に渡つたが、敗れた敵将というくらいの印象だつたと思う。その後、高校入学のために函館市に移り住み、「中島町」の由来が、箱館（函館）戦争で戦死した中島三郎助・長男・恒太郎・次男・英次郎を記念して命名されたことや、中島三郎助が浦賀沖にペリー艦隊が来航した際、旗艦サスケハナに乗船をした浦賀副奉行であつたことなどを知つた。

明治維新以前の安政2年、桂小五郎（木戸孝允）は中島家に寄宿して造船学を学んでいた。明治9年に明治天皇の東北巡幸に随伴して五稜郭に向かう途中、中島が戦死した付近を通過した木戸は、人目を

はばかりことなく慟哭したという。さて、明治2年5月11日、土方歳三が現在の函館市若松町付近にて戦死し、同月12日、武揚は、官軍参謀の黒田清隆から降伏勧告書を受け取るがこれを拒否し自らの死を覚悟した。その際、5年間のオランダ留学の際に入手した万国海律全書が灰になるとことを惜しみ、黒田清隆に使者を通じて手渡したとされている。同月15日に弁天砲台が陥落、翌16日に千代岱陣屋が落ち、中島父子が戦死したことを知ると、榎本は自らの責任と部下の命を救うために自決を図ろうとしたが止められ、翌日降伏するに至つたとされている。

箱館戦争により幕臣などの旧幕府軍として戦つた数多くの人々が亡くなつた。しかし、明治政府は、賊軍として戦つた人々の遺体を埋葬することを許さなかつたため腐敗するままに放置されたという。官軍として亡くなつた人々は函館護国神社にて祀られる一方、旧幕府軍というだけで埋葬されずに屍を晒すしかない不条理がそこにあつた。私は以前から日本国民に染み

ついた国民性、すなわち、白と黒とをはつきりと分けることに秀でた綺麗好きで、色合いのニュアンスを大切にできない本質を覺いている。昨今、スポーツ界においても、その本人が辞任するまで攻撃を止めず、その後、辞任する旨の報道がなされるや急に興味が冷め、次なる標的を探す報道に一喜一憂する少なからぬの国民の姿は、まさに憂うべき姿でしかないと覺っている。

明治2年5月17日、箱館戦争が終結した。その後、賊軍というレッテルを貼られたまま亡くなつた数多くの屍が晒されていたが、明治8年5月になつて旧幕府軍の戦死者を記念する慰靈碑として、碧血碑（へきけいひ）が柳川熊吉らの多大なる覚悟と尽力によつて建立された。土方歳三や中島父子などを始めとして約800名の戦死者を弔つている。

私は、高校時代、函館護国神社や碧血碑を訪れたことがある。その双方の間の距離は1キロにも満たないが、碧血碑がある場所はとても清らかな空気が通る場所だと

思つてきた。幕末における情勢を機敏に察知し、いわば迎合的に官軍についた数多くの諸藩の戦死者が護国神社の名の下に祀られ、旧幕府軍として戦つて戦死した人々が屍としてしかその存在を許さないという、従前から脈々と続く綺麗な助力により特赦により出獄した。その後、黒田清隆の再三にわたり懇願により榎本が再び北海道に開拓使として赴いていることはあまり知られていない。その後の樺太・千島交換条約の締結や天津条約締結に至る榎本の功績は極めて大きい。福沢諭吉は、その著作「瘦我慢の説」（やせがまんのせつ）で、武士道における「二君に見ええず」という精神に反する転向者であるとして榎本を批判したとされているが、國家、国民に向かつて視線を移す榎本の姿を見ると、福沢の見解は短慮に過ぎると思う。